

文化高知 42

「豊かさ」と自由時間

芹沢 寿良

一九八〇年代の後半に入ってから、「豊かさとはなにか」ということに国民の関心が高まり、今日もなお、いろいろな観点から論ぜられているが、私はこのこと自体、日本の国民生活の改善と社会進歩にとって大変意義あることだと思っている。そして、幅広い論議の中から「ゆとりの中に生活の豊かさがある」、「ゆとりの創造のためには労働時間の短縮が欠かせない」という基本的な認識は、ほぼ国民的コンセンサスとなったのではないかと受け止めているところである。働く者の組織である労働組合はもちろん、経営者団体や政府の政策的文書をみてもこうしたことが繰り返し強調されるようになって

いる。ところで、そもそも「ゆとり」とはどういう意味の言葉なのか。比較的新しい『新明解国語辞典』によると「何かをしたあと、まだ自由に出来る空間・時間・気力・体力などがあること」とある。なかなか的確な解釈である。一昨年、ある研究所のアンケート調査に答えた滞日経験数年以上のEC諸国の人々が、日本の働く人の生活について

て空間(住宅)の狭いこと、時間(自由時間)のないこと、人間(家族・友人との人間関係)が貧しいことから三つの「間」抜けと指摘した。まことに言い



堀詰辺り 横矢 勝

人間の生にとつての「時間の価値」が自覚されるようになったことはたしかで、それだけにより長い自由な生活時間への願望や要求はますます切実なものになっているとみてよいであろう。最近の政・労・使による労働時間の短縮をめざすさまざまな取り組みは、いうまでもなくこうした状況の反映であるが、わずかながらその成果もあがりつつあるようである。高知県における昨年度の「完全週休二日制」の普及率は注目される。

得て妙である。

「豊かさとはなにか」の論議によって、多くの人々の間に日本人の労働と生活の在り方にたいする反省が広がり、

労働時間の短縮によって創出されるより長い自由時間は、働く者にとって労働による疲労の回復にとどまらず、人間としての諸能力と自己の個性を形成し発達させるための、自分の意志で自由につかうことの出来る時間として、趣味・娯楽・スポーツ・芸術鑑賞・学習・社会的諸活動のために、また、家族との共同生活のためにつかわれるべきであろう。そうしてこそ人間らしい、生活の質の豊かさは築かれていくことになると思う。

(高知短期大学学長代理)

ふるさとに思う

—子育てと学校教育—

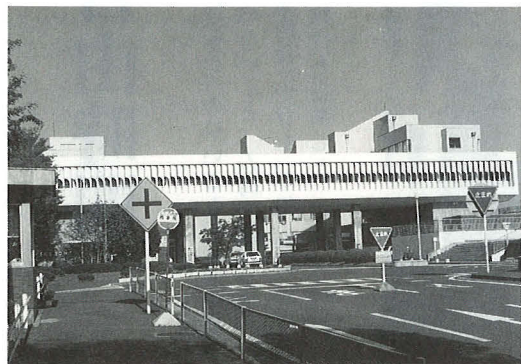
水谷 昭

土佐高の松浦勲校長先生から退職の挨拶状を頂いた。わが尊敬する師であり、土佐中の大先輩でもある。どうか土佐の銘酒でも味わいながらゆっくりと積年の疲れを癒して下さいと申し上げたい。

近年、子育てや教育に関して気になる話題が重なる。第一に過保護の子どもの話をよく耳にするが、子どもの数の減少はこの傾向を助長しよう。戸川幸夫さんの『ヒトはなぜ子育てが下手か』という本は、自然界の動物の例から子育てや教育の問題を考える上での示唆を与えてくれる。例えば、優しいだけで厳しさをない母親に育てられた子猿が、後に強いものに卑屈で弱いものには暴君になるという事実は、過保護に育った子の将来の一側面を暗示するだろう。

しても、その生命を育むことのできない親の増加は深刻な話である。乳幼児期以来の子育てのさまざまな歪が学齢期になっていわゆる問題行動として現れるようであるが、もちろんそれがすべてではない。ある少年院の院長さんの経験談によると、中卒年齢の突っ張り少年に小学校三年の計算をさせたところ、さすがにこの程度の内容はこなすことができ、順次高学年の教科書に進んですっかり自信を取り戻して明るい青年に成長したという。ゆとりの無い過密な文部省指導要領、それにひたすら忠実な教育委員会、それをこなすに精一杯の学校、そこでは個性を發揮されては都合が悪いし、歩みの遅い生徒たちには切捨てしか道が残されていない。加えて、大学受験の予備校化する高校、それが順次線下がって中学校、小学校へと波及し、これに振り回される親たちの不安から塾が大繁盛する。

こうした中を、子ども達はわき目も振らずに突き進んで（正確には突き進まされて）、幸い校門で先生に押しつぶされることもなく、最後の目標である大学に入るためには替え玉受験も辞さない。入学してからは自らの選挙権を他人に譲り渡す重大さにも思いが及らず、卒業試験に不



勤務するコロニーの入口

合格で留年させられると親も一緒に泣いて騒ぎ立てる始末である。偏差値の高い子だけが全人的価値を与えられ、勉強は少し苦手でも健康で明るい子が劣等感の塊になってしまふことに私は拘りを持つ。子ども達が秘める無限の可能性を引出し、溢れるような感性を伸ばすどころか、それらを涸らす方向に働いているとしか思えないような子育てや学校教育の問題を真剣に考える必要がある。それも単に情緒的な反応でなく論理的な組立てで、日の丸や君が代を強制する前になすべきもつと大切なことがある筈である。また、徒らに進学率や東大への合格者数を論ずるのは教育を荒廃に導く。

そこでは思想的な右とか左とか、体制派とか反体制派とかいうレッテルや、あるいは、専門家とか素人とかいう分類は無用である。ただ、子ども達の教育を考えるときには子ども達を常に視野の中心に置いてという単純な基本を強調したい。これは私が障害を持つ子ども達とのつき合いを通して学んだ教訓である。

高知を離れて四十年余の歳月が過ぎた。最近の高知の教育事情はどんなものであろうか。ふるさとを思うとき、私の関心はその教育と私の専門に関わる医療に向いていく。

(愛知県心身障害者コロニー総長)

未来会議の目指すもの

—安芸郡北川村—

浜渦 弥一

昭和三十年には四千人余りいた村の人口が、近年には千八百人を割り、六十五才以上の老人の占める割合も、二十五パーセントに近づき、社会減に拍車をかけるように自然減も進んでいる。

かつて村内に七カ所あった小学校と、三つの中学校が、今では各一校ずつに激減した。

農林業立村でありながら「ユズ」以外にこれといった産業もなく、当然のごとく、村内には活力は乏しく、意欲のある有能な者から順に、村外に流出してしまっている。

こうした中であって、ふとした事から、村商工会青年部の創立に関係し、今日まで内外のイベント等に積極的に参加、協力をしてきた。

青年部を結成し、さてこれから何をすべきかという時に、偶然にも村外の同年代の青年達の進めていた「中岡慎太郎の映画作り」に、中心団体の一つとして取り組むことが出来た。目的達成後「慎太郎を表舞台に出す会」は解散したが、やはり何か物足らなくて、村の有志に呼びかけて、新たな地域研究集団「北川村未来会議」を組織した。

現在の登録会員数は十八名、多種多様な職業人の集まりであるが、この仲間のモットーとする事は、考え即実行すること。いいだしっぺが



慎太郎生家での交流会

リーダーとなって行動するが、賛同しなくても、けっして足を引っ張らない事を信条としている。又、グループのシンクタンクとして、村内外のそれぞれの道のご指導願っている。

現在の会の大きな比重を占める、月二回の農産物直販店「山里市・北川」を始め、一年半になる。村内生産者より商品を預かり、国道55号線沿いの奈半利町内の村有地で、近くの住民を対象に販売している。現在までの売上総額は約七百五十万円、全額の十パーセントを手数料として

いただいているが、その内約五百パーセントは昼食代や袋代になり、毎回の不足分が約二パーセント、残りが会の活動資金として貯えられている。毎回の参加者は会より七、八名、最近では生産者が数名ではあるが、手伝ってくれるようになった。

出品者は毎回三十五名位、一、二回でも出品した事のある者は九十名をこえる。大半の者が、売るために作っているのではなく、家にあるからといった感覚で出品している。販売協力者は全員ボランティアであり、この「市」は私達のメンバーにとつても、生産者にとつても、共に学習の場でもある。

月一回の定例会の開催。二年にわたり、村内を巡回しての住民との対話集会。又、それをまとめて村執行部との話し合い。慎太郎ユズのブランド化。現在進めている慎太郎窯の製作（陶芸）。人材育成を目的とする未来塾の開催予定。又、今までの学習、研究の結果から、自分達の欲する村のビジョンの策定計画等、大変欲ばった多くの物を求めている。

自分達が、人生を楽しむと共に、住民に少しでも喜んでもらえるような村づくり、地域づくりをしようといういろいろな事柄に積極的に取り組んでいる真最中である。

(北川村未来会議会長)

高い英智の街はいずこに

—香川県から見た土佐—

谷 是 ただし

高知県には明治以来「道路知事」という言葉があった。道路さえ良くなれば、高知は良くなるという神話、長く県民の意識を支配してきた。もちろん、それは誤りではない。しかし現実には、文化行政の遅れや、大学誘致、私学振興策の無策振りなどが、今日、四国の北と南に大きな格差をつけていることを指摘したいのである。

香川県は古くから教育立県をめざし、私学振興をはかってきた。今日、大学でも七つか八つは優にあり、総合大学としての体制を整えている。加えて学生は、四国一円はもとより、岡山、広島、兵庫、九州といった広域からかき集め、高松を中心とする衛星都市を大学街として振興させてきた。学生が集まればマンションができ、レストランやハンバーガーの店ができ、書店が増える。健康な胃袋と旺盛な知識欲を持った若者の集

団は、毎月十二、三万から十五万の金を街におとすばかりか、周囲に活気を与え、若さ溢れる社会環境を生み出した。

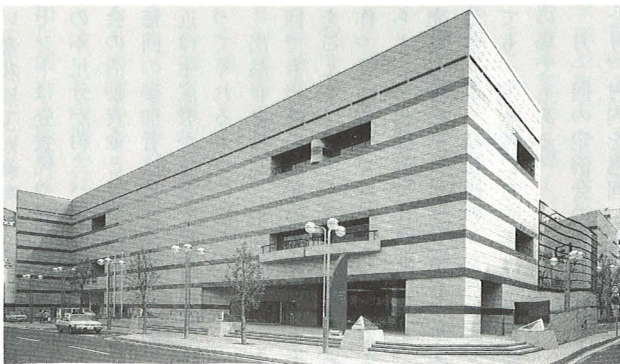
そればかりではない。今日学生のアルバイトが、企業の重要な労働エネルギーとなり、存立条件の大きなシェアをしめているのである。例えばセシールという通信販売業者などはその例であろう。本来、何もない漁港である志度という町が、大学誘致に成功したばかりに、企業まで誘致された例である。今日高知県ではリゾートの呼び声が高いが、年中滞在してくれる若者を集めた香川県と、大学や専門学校が少ないために、若者が流出する一方の高知県とは、自ら軍配は明らかであろう。なぜ女子の高等教育の時代が到来することを見し、私立女子大学の振興や誘致ぐらいはできなかったか。社会も行政も怠慢であったと言うより他は

ない。

加えてこの事実は、文化レベルの差というものを、いやがうえにも生じさせる結果となった。学校が多いということは、教育者や研究者を輩出さし、芸術活動、文学活動にも大きな格差を生み出してきた。

今日高知でオペラをやるうとして募金活動が行われているが、香川県では音楽の先生方が団結し、学生がバックコーラスを担当、年に一度「手づくりオペラ」を堂々とやっている。ホールも二千人、千五百人ホールと二つ、愛媛に至っては、三千人ホールが一つ、二千人が一つ、千五百、千二百ホールを加えると、五つもある。高知には千五百人ホールが一つ（後は五百人ホール）、しかも毎週月曜日は休みという状況では、スケジュールは合はいししない。高知はホールがないからやめておこうということになる。本物の演奏や演劇に触れる機会は、ますます遠のいたと言わねばならない。

それは舞台芸術ばかりではない。高松には中心街の真ん中に日本銀行があった。その立ち退き跡へ、市立美術館をつくったのである。都市型の美術館だから、広い庭があるわけではない。だが、美しい大理石に覆われた優美な姿は、高松の核になつたばかりか、だれもが自由にはい



高松市美術館

れるホールや図書室、喫茶室の機能は、今や高松へ散策に来る買物客のよき「止まり木」となっている。そればかりかその周辺には、いつしか版画や美術品、西洋骨董、家具などの店が集りだし、アートの雰囲気にも満ちた中心ゾーンが形成された。高松という街そのものの格を、引き上げたような感があるのである。しゃれた街灯や並木はもとよりだが、その中を若者たちは行く。彼達の言葉で言えば「様になる」というものだろう。

高松では数年前にメインストリ

トのバイク、自転車の駐車を条例により完全に禁止した。当初は多少の車もないではなかったが、今では全く影をひそめてしまった。加えて電柱を地下に埋め、歩道を水の溜らないような建材で敷き、並木の下にある植え木（高知あたりは西洋萩が多い）をへらして、歩道を広くし、余裕のあるところは花壇を置いた。四季咲きのパンジー、ヒナゲシなどが常時咲いている。歩行者は横になつて、会話を楽しみながら歩ける道にしたのである。さらに高知のはりまや橋にあたる番町交差点では、市制

百年を記念して、立橋を廃して地下広場をこしらえ、身障者のためのエレベーターまで添えた。美術館とい、地下広場とい、高松のカルチャーの象徴となったのである。

私は四年間の高松在勤中、時々土佐の知人に街で会うことがあった。「高松へ専門書を買いに来た」と言う。ここではMという大書店が専門書のコーナーを充実させ、客のニーズに応えている。五時か六時になると帰宅中のサラリーマンで溢れ、活況を呈するが、仕事がすむと飲み屋

へ走る土佐人の姿を思うとき、ある種の感慨にふけることも多かった。土佐人の生活には、遊びの部分がはいり過ぎていて、ゴルフだ酒だカラオケだと、いわゆる「キリギリス」的な遊び意識の中に、社会も個人もどっぷり浸かっているかに見える。そして口を開けば「行政がいかん、他人がいかん」と泡を飛ばしてやまない。一生を賭して志を持し、地味にも学問や芸術に精進している篤学の人を敬仰し、大事にする土壌があるか。いや、自分自身も創造し向上する存在として認識していると言え

ようか。三百年八十年前、山内忠義が居城の城山を「河中山」から「高智山」に改め、高い英智のある街にしようとしたことは歴史が語るところである。今からでも遅くない。パイオや海岸工学、情報産業といった学校や研究機関を誘致し、全国の頭脳を流入し、若者に魅力のある街づくり、職場づくりを目ざすことだ。酒とパチンコと女遊びとゴルフ、公営バクチで有名なだけの低俗な観光地にしてはいけない。これだけは明言しておきたいと思う。

(高新企業事業局局長代理)

県内の文化活動の現状を学びたくて、注目される活動を行ってきた十市町村の十二団体を訪ねた。それらは、香北町の遊・裕共和国や大川村の謝肉祭に代表される「イベント主導のもの」や、北川村未来会議や佐賀町ボランティアの会のような「地域活動中心のもの」などそれぞれに個性的な活動を行っているものだ。

を通じて、職域を越えた協力関係ができ、地域の結びつきが強くなるといった効果が表れているのは意義深い。ただ、イベントには、新しい文化創造といった積極的な意味合いが強く、旧来からある文化遺産を保全するといった立場が稀薄な印象があった。

県内の文化活動に学んで 高瀬 允仁

「この団体も自分たちの地域の特性をうまく活かした活動をしている。いかに独自性を持った取り組みを行うかを常に問いかけているようであった。そのかきあつて、どこも内外の人々の好評を得ている。」

とりわけ、イベントの持つ対外的なアピール効果は大きく、地域のイメージアップに貢献している。さらに、イベントの運営

そうした点で、文化遺産の保全という要素を踏まえたイベントを行っているのがマリノフェスティバル室戸であろう。マリノフェスティバルは、海・鯨という室戸市の昔から持っている特色を活かして、親子舟の復元や、それを使ったレース、ホエール

目される。これに対して、地域活動を中心としたものは、イベントほどの華やかさはないものの、住民の小さな声にも耳をこして、一つずつ地道に活動をしていこうとしており、自分たちの地域への愛情を強く感じさせる

ものであった。「住民による自治」のあるべき姿であるといえよう。

いずれにしても、十二団体それぞれが地域に根ざして、活性化に努力している姿は、高知市をはじめ他の市町村も大いに参考とするべきであろう。住民の自治意識の高揚、土着の文化をひまえたイベント、イベントを越えた将来ビジョンの形成など取り組むべき課題は多い。

マリノフェスティバル担当者の、「市町村史をよく読んでごらん下さい。そこには特有の伝統や文化、そして町の課題までもが見えているはずだ。それを活かした地域おこしを進めることが大切なのではないでしょか。」という言葉が印象的であった。

(地方公務員)

海鳴り (三)

堀内 豊



聞くところによると、昭和の一ケタ時代から五十年頃までに、家族が待つ目の前で沈没し、犠牲になった者は三十余名、とのことだが、むかし庄屋十衛門が生きていたころの漁船は、ほとんどが三枚帆漁船か小漁舟であったから、人食い港に呑みこまれた船は夥しいものがあつたにちがいない。

ともあれ、漁民とその家族にとつてつらいものは、なにも海上のことだけではない。陸で待ちかまえてるのは、食糧難……。

がんらい宇佐浦は、稲、麦作の耕地面積が狭小だから、食料の自給力は、問題にならないほど弱い。

私が、十歳そこそこの頃……。「宇佐で穫れる米は、町民がたべると三ヶ月分しかない。あとの九ヶ月は、他所から移入しないと餓えてしまう……。」と、聞いておどろいた。

このように、宇佐、福島、渭之浜は、むかしから米、麦、大豆などの穀物を、もっぱら他所から移入して、食いつないできた歴史がある。

さしあたって、宇佐浦における食生活の窮迫ぶりを資料でみると……。

元禄三年(一八八二)の宇佐浦・中野屋の『年譜書』に、
当年浦々不漁、殊に米穀高値に付き困窮の浦柄もあり。
また、

浦々不漁の上、米穀高値に付き困窮の浦方これあり。

と、誌されて、この年(元禄三)七月三日に、宇佐浦の若者が、米屋三軒を叩き毀すという事件が起こっている。

そのとき暴動に参加した十一名が城下牢屋送り、八名が地下預り(牢獄入り)、罪状の軽かった十九名が遠方禁足(他村への外出禁)の処罰を受けている。

枚帆の船で商用に出た。

長州・下関(山口県)で商用を果たしての帰途、豊前国(大分県)の姫島沖で海賊に襲われて、金品を強奪され、揚げ句のはてに九郎右衛門次郎が殺害されて、介三郎ただひとり、命からがら逃げ出して、無事に帰国したということだった。

それに不審をいだいた四郎兵衛が、本人を呼んできびしく糾明したところ、やがて介三郎は犯行を自供した。直ちに四郎兵衛は、介三郎の身柄を紀州に移して、同年六月一日、紀州藩家老・渡辺若狭守に談じこんで、六月五日、介三郎を郷里の藤白で磔刑に処せしめた。

と、いうようなことで、その頃の四郎兵衛は、文字どおり息つく暇もなかった。

だから、十衛門の事件に関して、四郎兵衛は、繁忙を理由に無関心であったかという点、どうもそうでもなかったようだ。

先に紹介した「萬覚並状之跡書共」には、事件の要点だけをさりと書いて、自身の感慨めいたことは、一言半句も記していない。

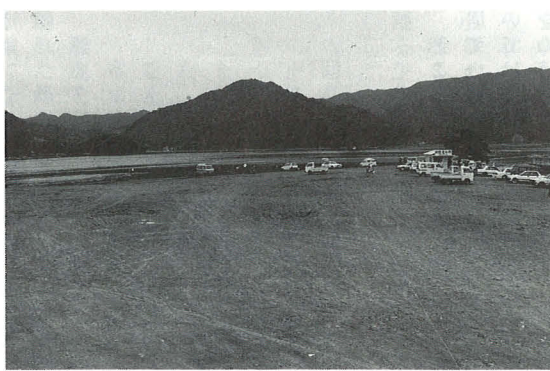
が、文面の後ろで、四郎兵衛の、語ろうにも語れない、深い想いがひそんでいるような気がしてならない。すでに記したが、四郎兵衛と十衛門は同郷者である。ふたりは若いこ

さらに、この年から三十余年経つ慶応三年(一八六七)に、宇佐浦橋田の真覚寺住職・井上静照が、不漁と米価の値上げのために困り果てた浦人の悲痛な姿を『晴雨日記』(通称・真覚寺日記)に活写している。同年正月十日の出来事を次に抄出する。

昨年来宇佐浦小家の者に困窮多く、三軒の酒屋(この一軒は、後年元酒屋と称し、私の生家の先住者とか……)かはるかほる粕を売るに、大抵二番鶏位より行くもあり、夜明け前より行くもあり、風呂敷の類へ銭を添早く取帰らんとして我さきにとせり込み、ひしめく声三町斗も脇へ聞ゆ。せり例されて叫ぶ子供もあり、頬より血の流るるもあり、袋をさし出すを横に奪ひ取て逃るあり、左なきたに(そうでなくても)その日その日を送り兼たるに式三匁の粕代を取られては、忽ち朝の食を欠くとて泣き泣き空手にて帰るもあり、実に此咄を聞くさへ傷ましき事也……(略)。

宇佐の中にて是まで相應の暮しせしものも、旧冬の困窮に迫り無據(よんどころなく)兄弟夫婦別れ別れになり、城下へ奉公に出るもの四、五十人斗なり。

すこし引用が長くなったが、じつ



渭之浜から横浪半島を望む

ろから、朝に夕に海鳴りの音を聞いて成人したから、お互い相手の顔を知っていたやもしれない。

そうでなくとも、四郎兵衛が宇佐浦分一奉行を専(兼)任していたころから、互いに職務上で顔見知りだったはずだ。

そうした人間関係の絢が、四郎兵衛の心理を複雑なものにしたことは、想像に難くない。

ところで、十衛門が自裁の原因をつくった『御城銀・御城米、合計銀九百三十五匁』は、彼が個人的に費消したか、それとも、息子、所兵衛が、父に隠れて遊興のために使った

くり読むと、測々と胸にせまつて熱いものがこみあげてくる……。

たぶん庄屋・十衛門の時代にも、こうした情景とさして変りのない構図を見ることができたとおもう。

極言すると、深刻な食糧難に幾たびも遇いながら、やっとの思いで生き凌いだのが、哀しいかな、わがふるさとの遠祖たちのすがたであった。ところで、食糧危機に際して、浦人がそれを打開する方法がただ一つあつた。御蔵米を前借することである。が、誰もができることではない。当然、庄屋の尽力を得ないといけない。

たとえ前借りできても、荒天で不漁がつづくとか、あるいは漁価が低廉だったり、海難事故に遇うとか、まったく予期しないことに出くわすと、元金はおろか利息も払えない。それでも、必死のおもいで空腹かかえて小漁舟をくり出すが……しかし、となれば、庄屋に泣くつくよりほかに仕方がない。

庄屋も人の子……なんとかしてやりたいと思つても、それが一人や二人ではなく、多数の場合だと、どうする。やむなく腕をこまねいて、浦人のくるしむさまを見ているだけか……。

十衛門が自害した背後関係を推測すると、「新浦」がかかえる

のか、という点では、いずれも否、と答えたい。

なぜなら、渭之浜が「新浦」の藩許を得て僅々五年ばかりである。その一庄屋が、独断で藩倉から、城米・城銀を持ち出すことはできない。

(当時の宇佐浦には、年貢米等を収容する倉庫が、現在の中郷引地の西端に三棟あつて、その場所を土地の人は「お倉跡」といった。

また、渭之浜に藩倉が一棟あつたそうだが、場所は不明)

宇佐浦の藩倉庫について、「浦衛旧記抜書」(高知市民図書館蔵)に「寛政七(一七九五)宇佐浦御蔵前ノ内大阪御売米指登候処」とある。

ここに誌されているように宇佐浦の藩倉から、上方へ販売する米を搬送している。一方、搬入される米の殆どは、現在の土佐市全域の年貢米であつた。

年貢米を輓馬に積んで、宇佐坂(塚地坂)を越えて運ぶか、又は波介川から、仁淀川の水運を利用して藩倉へ納めた。

さて、渭之浜にあつたとされる藩倉は、福島浦分一役所が管理していたから、いくら十衛門が浦役人と顔馴染みだからといって、許諾がないかぎり、勝手に門扉を開いて、城米・城銀を持ち出せるわけがない。

(高知県職業安定審議会委員)

土佐の高知を思う

梅澤 俊一

生まれ故郷北海道を後にして土佐の高知に移り住んでから間もなく四十一年を迎えようとしている。

子供のころ、大人の人達の「内地はどうのこうの」という望郷の思いを出を聞いたことであつたが、そのうちに、北海道は内地で、外地でないことが分ると、それまでは「内地は暖かくてカキヤクリがなるのでいいなあ！」などと話す時に何のためらいもなく用いていた「内地」という言葉に強い抵抗を感じた。

そして、父や母の故郷の親戚を余り具体的になく呼ぶ時に用いた「内地の親戚・おじさん・おばさん」の内地という言葉は使われないように気を付けるようになった。

ともあれ、今から半世紀前ころの北海道はまだ「外地的」な匂いというか味というべきか、リベラルなムードが漂っていたようである。

それは、北海道開拓という大事業に本州・四国・九州から多くの人々

がいろいろな形で参画したからで、いふなればそれぞれの伝統と文化を担った人々の寄り合い所帯であつたからではないであらうか？

何故ならば、寄り合い所帯ではその始めは互いに己の風俗や習慣を主張したであらうが、そのうちに己の主張を相手に聞き入れさせようとすればするほど、自らも相手の主張を聞き入れなければならなくなったことであらう。

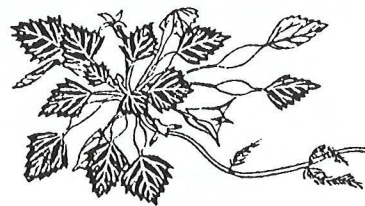
そこで、角のある岩石が川の上流から流れて下流に至る間に互いにおつかり合つて角がとれ、丸みを帯びるように、己と相手の風俗や習慣はそれぞれが互いに相手の中に溶け込んで、融和することになる。

そうなると、互いの心の間にバリア（柵、垣根、壁）がなくなり、つまり、互いに物が言いやすく、自由に出入りできるようになる。そのためであらうか、いや、そうではなくてもっと切実な現実の問題として見

るべきであらうが、そのころの北海道では門を構え堀を巡らした家は少なかったようである。

とにかく、何となく北海道にリベラルな感じが漂っていたのは、北海道を開いた人々の自我が他我がの融和が賜物として残っていたからではないであらうか。

さて、長い間に培われた伝統と文化を継承している土佐の高知に住むようになって、当然ながら「郷に入つては郷に従え（従う）」の諺は大切なものとして尊重しようと思がけ



ところで、同じような諺に「郷に居ては郷に従え」があつて、「郷にいては郷にしたがえ、門に入らば笠をぬげ」となる。

てゆく。消えるとすぐまた音がでる。それがあの可憐な鹿の表情をいっそう深めてゆく。

深まりのなから、たたきながら踊る少年たちの清らかな声が漏れてくる。

へ回れ回れ水車、遅く回りにて堰に止まるな

へ十三からこれまで連れたる雌鹿をば、こなたの庭に隠しおかれた

た

へなんぼ尋ねても居らばこそ、一本すすきの陰に居るもの

雌鹿を尋ねもとめての道行きから、隠れた雌鹿を中心にして四頭の雄鹿が輪になり、輪を崩し、輪にもどりが片足跳びで行き交ひ踊り廻る。異国の鎮守の森で感じたこの哀愁が、わたしの民俗芸能への旅立ちとなつたのである。舞台芸術であればいくらかでも哀愁を漂わす演出は可能である。感涙の場面すら可能である。しかし祭りの庭の地面の上でこれほどの哀愁を醸し出すのはどうした

とか。哀愁の深奥にある神秘といふか、不思議といふか、人間の創り出したもののなかにも神秘と不思議とが存在する。それは自然のみの特権ではない。そんな痛切な思いが胸中に渦巻いたのである。それ以来、憑かれたように祭りの庭の踊りを尋ねて道行を始めたのである。西土佐村

こうなると「ハハッ！」とひざまづく図が要求されようである。しかし、土佐の高知は自由民権発祥の地であるから、このようなことはあつてはならないことである。

それとも、この地には発祥の地というモニュメント（記念碑）だけしか残っていないのであろうか。

そうではないとすると、「土佐に住んでは、土佐に従え」と一方的に強要することは、土佐人に馴染まないことになり、青い空・青い海・四国山地をバックボーンに両手を広げたような土佐湾の恵まれた自然環境のもとで、リベラルな人間環境が必然的に生まれてくるようになると思えるのである。

伝統と文化遺産を継承することは大切である。しかし、今日に生活する人々も未来に残るべき伝統と文化を加えなければならぬ。

そのためには、「他人の飯を食べた」ときの思いを胸に秘めて、「他人に飯を食べさせる」ことが大切なのではないであらうか。

二十一世紀を目前の間に控えて土佐の高知の未来の栄光を望むならば、イゴソウが誉れであるというような、半ば開き直つた言い方は他の何かと融和して素晴らしいものになければならぬと思うのである。

（高知大学名誉教授）

土佐の芸能10選 ⑦

哀愁漂う五ツ鹿の踊り

高木 啓夫

可憐な踊りである。哀愁漂う踊りであつた。祭りの庭で奉納される芸能には神楽、獅子舞、太刀踊、盆踊りなどがあるが、いずれも勇壮、豪快、優雅、躍動、軽妙といった言葉のいづれかに適応される。しかし、五ツ鹿の踊りだけは可憐にして哀愁漂う踊りである。そしてまた、わたしにとつて忘れることのできない踊りである。

三十三年前のある日の秋空に、わたしは国境を通り過ぎて愛媛県一本松町の、祭り太鼓の鳴り響く鎮守の森にいた。樹木は広い境内に覆いかぶさっていた。そこに締太鼓の音が聞こえ、白い五つの仮面が一行になつて鳥居をくぐり抜けてきた。それが五ツ鹿の踊り子たちであつた。足を元を脚半で締めつけ、いかにもほっそりとみせてあるから、鹿頭がいつそう大きく見えた。長く太い角、真白い顔面に描かれた黒く太い眼。



鹿のかしら

踊りの庭の一隅から足並み揃えて一歩一歩静かに進みはじめ。折り曲げた膝を高くあげるから、地面についた足がすらりとのびる。あの鹿の細い足だ。垂れ下がった胴布の中からは締太鼓の音がする。締太鼓の音は浅くか細いものであるから、祭り太鼓のように響き渡ることがない。五ツ鹿の踊りのまわりですぐに消え



幡多郡西土佐村五ツ鹿の踊り

の鹿踊りもそうして訪れていったものである。

五ツ鹿の踊りは元和元年（一六一五）仙台藩主伊達政宗の子秀宗が伊予宇和島に封ぜられたときに、古里の踊りを移したものである。それが土佐沖ノ島、西土佐村、十和村に伝えられたものである。しかし、外来であつても根着いてしまえばもう土佐の民俗芸能であり、土佐における唯一の哀愁の民俗芸能となつたのである。

獅子舞には胴布の中に二人の使い手が入り込む二人立ち獅子と、鹿踊りのような一人立ち獅子とがある。前者は東日本に多く、後者が西日本に多いのも、またそれなりの神秘と不思議とがあるに違いない。

（高知県立高知工業高等学校教諭）

流れ灌頂

坂本正夫

今はお産で死ぬ者はほとんどいなくなったが、医療技術が遅れていた戦前までは「お産は女の大厄、片足を棺へ突っ込んだようなものよ」といわれていたように、哀れな最期をとげた女性もいた。

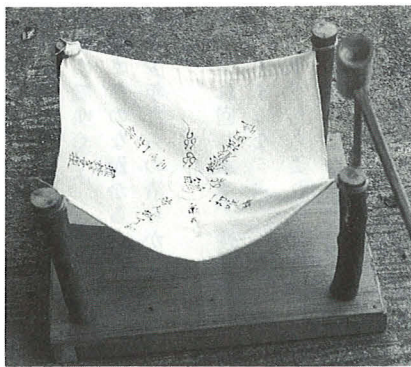
産婦が死ぬと、あの世で血の池地獄に入れられて赤鬼と青鬼に朝から晩まで苦しめられるが、髪が池の中の血にとどいたら許してもらえないので、そのときのために普段から髪を長くしておくものだ、といわれている。そのため高岡郡仁淀村大植や越知町栃ノ木、葉山村床鍋などでは、産婦が死ぬとかもじ（添え髪）をつけて身長よりも長い髪にして納棺していた。高知市布師田、南国市白木谷、香美郡香北町市川などでは、死者の髪を切り取って輪の形にして、胴体に掛けてやっけてから納棺していたが、これは血の池の中で浮袋として使うためだといわれていた。

産婦が死んだ場合、その成仏を願って行く供養を「流れ灌頂」というが、土佐ではこれをヒヤクニチザラシ（百日晒）とかセンニチザラシ、あるいは単にサラシ、サラシラスルなどと呼んでいた。

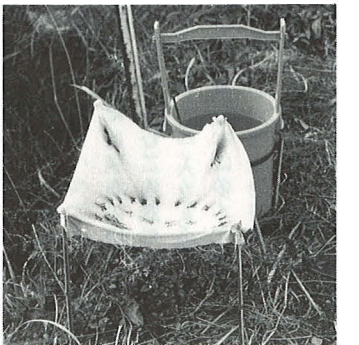
人通りの多い道の四つ辻や分岐点、橋のたもと、川辺りや泉のそばなどへ高さ五十センチ〜七十センチばかりの青竹を方形に立て、これに青竹

の棚を作り棚の上には白布をひろげ、中央に死んだ産婦の戒名、四隅から対角線上に「迷故三界域、悟故十方空、間処南北、本来無南北」などと墨書し、そばには水を入れた桶と柄杓が置いてあり、通行人に水をかけてもらっていた。

高岡郡窪川町米奥や幡多郡西土佐村大宮、三原村皆尾などでは、女は罪深いから百日間あるいは千日のあいだ、通行人に水をかけてもらわないと成仏できない、といっていた。土佐市四方寺、仁淀村大植、吾川郡吾川村引地などでは五十日晒せば成仏できる、といっていたが香美郡夜須町国光、長岡郡大豊町桃原、宿毛市橋上などでは布が破れると、「死人が浮かんだ（成仏した）」といっ



百日ザラシ模型（大正町民具館）



土佐市波介で見た百日ざらし（1968年）

日本民間信仰では事故死、産死などのように非業の死をとげた者は成仏できず、無縁仏となつてこの世にさまざまな災いをもたらすという観念が強いが、流れ灌頂はこれと仏教の説く血の池地獄の観念が習合してできた習俗である。

なお流れ灌頂は産死者の供養として行われることが一般的であるが、性別に関係なく山や川などで事故死をしたり、海上や他国で死んだりして成仏できないと考えられる場合に行われることもあった。また産死者や山、川、海などで非業の死をとげて成仏できず、この世に浮遊している靈魂を供養するための千枚流しや川渡しなども行われているが、これはよくないことが生じたり、不思議なことがあつたりしたときに、祈祷師や僧侶などを介して行われることが多い。

（高知県立小津高等学校教諭）

東京赤坂に「憲法記念館」と称する木造瓦ぶきの重厚な建物が現存する。これは一八九九（明治三二）年二月一日公布の「大日本帝国憲法」の草案審議会場に使われ、明治天皇はこの会議に一度も欠席しなかつたと伝えられている建物である。

その後天皇は、伊藤博文の憲法制定の功労に酬い、これを彼に与えた伊藤は赤坂仮御所にあつたこの建物を大井村の自邸に移築して、「恩賜館」と命名していた。一九一八（大正七）年伊藤家が明治神宮に寄贈し、再び現在地に移築され「憲法記念館」と称し、皇室関係の諸行事だけに使用されていた。敗戦後の一九四七（昭和二二）年一月に他の施設も包括して「明治記念館」と称し、洋式の新館は結婚式場・披露宴・同窓会などの宴会場に、かつて憲法草案審議に使われた会議室は喫茶や軽食に使われている。

植木枝盛旧邸は約一一九平方メートル（約三六坪）で、枝盛はこの書齋で一八八一（明治一四）年八月二十八日に「東洋大日本国憲案」の起草を始めた。

国会開設の請願を受理さえしない政府に業を煮やした国会期成同盟は一八八〇（明治一三）年一月の集いで、「我国国土は我国人民の国土なり、其国土に国会を開くに豈に願ふ

の理あらんや」ということで、自分たちの力で国会を開くことを決意し、加盟政社はその為の憲法草案を明年一〇月一日開会予定の集會に持参することを決議していた。

生き続ける自由民権

憲法記念館

と

枝盛旧邸

外崎光広



憲法記念館

た明治政府の草案は、「大日本帝国八万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と天皇主権を宣言し、しかも「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と定めた。植木が桜馬場の陋屋でつくつた

得」と、人民の革命権を定めていた。桜馬場の陋屋でつくつた草案は、天皇所有の豪華な会議所で作つた草案に押し潰されたが、この二つの憲法草案が歴史の審判を受ける日がきた。一九四五（昭和二〇）年八月一日の敗戦である。天皇主権の「大日本帝国憲法」は廃棄され、人民主権の「日本国憲法」の成立である。その後サンフランシスコ講和を契機に憲法改正論が登場し、反動攻勢は強化の一途を突っ走り、最近では「主権奉還論」さえ公然と叫ばれはじめている。

このような逆コースの思潮の中で植木枝盛に対する熱い関心が高まり、枝盛が憲法草案を起草した旧邸保存の声が絶えないのだが、この家屋には知られていないもう一つの由緒がある。枝盛の父直枝は鹿持雅澄の高弟で、宮内省の『万葉集古義』の出版に際し、直枝は雅澄関係の著書を「献上」し、その校訂にも力をついた。

一八九一（明治二四）年宮内省から刊本『万葉集古義』の「下賜」を受けた直枝は、桜馬場のこの家に月六回位の割による公開の会説を組織している。倒壊の危険のせまっている植木枝盛旧邸の保存策を切望する。

（高知短期大学名誉教授）

その日が迫つた八月二八、二九日に台風が襲来し、外出できなかつたため、植木は国会期成同盟に提出する立志社憲法草案の作成に取り掛かつた。

豪壮な「憲法記念館」でつくられ

高知の すばらしい文化を継承して

森 尚 水

漫画『まめだ先生』を出版した子どもたちは、四年生の時、ずいぶん荒れました。私が担任した五年生になっても続き、私の学級通信第二号（四月八日）では、はやくも、「友だちが立てついていると、そのイスを後ろから引こうとする者、……六年生が廊下を通ると、『アホウ』『ハゲ』という者……」とのせるほどでした。一部の子どもは暴力・いじめ・ぬすみ等はそう簡単にはなくなりませんでした。そんなある日、地域のおばあさんから、「先生とこの子どもがブレイキのこわれている自転車坂道をおりてきよって、あぶなく車にぶつかりよったので、『気をつけなにかんぞね』というたら、何と言ったと思います『クソババア』いうて、逃げていったぞね。」という話があり、私は冷汗をかいてしまいました。

小さな地域に住んでいながら、人を知らない子どもたち。私は地域の人・自然と子どもを無数の糸で結びつけることなくして、人間らしく育つことにはないと思っています。このことが地域新聞づくりにつながっていったのです。

子どもたちは何の抵抗もなく、新聞社をつくり、日刊地域新聞を一日も欠かさず出しつづけています。私

自身が十数年間一日も欠かさず学級通信を出し続けていることもきつと影響しているでしょう。

九カ月間出し続けるなかで子どもたちは二つのことをつかみました。一つは、地域の人が話がよくできだしたということ、もう一つは浦戸のことがよく分かりだしたということです。



もっとも大切な二つのことを二十四人全員が感じとっているのです。子どもたちを地域の主人公に、という言葉も本物になってきました。

『うらどっこ』新聞を発行しだして、三カ月のことです。四コマ漫画のおもしろさが地域で話題になっていました。高知の文化、それは漫画王国、そして南方綴方。ふと、漫

画で一年間を綴ってみたらと考えると、子どもたちに提案しました。こうして、おそらく日本でも世界でも初めてであろう子どもたちによる四コマの漫画綴方が誕生したのです。

今日ほど教育をめぐって、親と子、教師と親・子等がぎすぎすしていることはありません。この『まめだ先生』は、子どもたちがユーモアを武器に私を批判し、私に訴えてきているのです。ですから、私も何のわだかまりもなく、受け入れることができました。高塚高校での痛ましい事件で象徴される管理主義教育が横行するなか、子どもによりそう教育が今後ますます重要になることは間違いありません。

『まめだ先生』は、たんなる私の思いつきではなく、生活綴方教育の一側面を継承し、たえず民衆の側にあった漫画の持つすばらしさを、ここでいえば子どもの側に立ったすばらしさを少しはありますが、念頭において出版したのです。

子どもたちは、あいかわらず新聞を出し、漫画を描いています。そして、やっと盗みや暴力のほとんどない普通の子どもになりました。

地域に根ざす教育、古くて新しい課題です。（浦戸小学校教諭）

高知の映像コンテスト入選作品



高知を撮る 朝倉神社宵祭り 岡 政武

笑いの本質は、本来軽薄なものではないと思うが、このごろだんだん軽薄になっていくように思える。テレビなどを見ていても、これでもかこれでもか、と無理矢理笑いを強要するやり方は、逆に途中でしらけてしまっただけで笑えなくなる。

それに比べると古典落語の笑いなどは、人の生き様を含めて、現代の人々がめまぐるしさにかまけて、どこかにおき忘れてしまったものを、呼び戻してくれるものがある。

笑はば……



風俗歳時記

さて人は、どんな笑い方をするのか。大笑い、高笑い、豪傑笑い、馬鹿笑い、哄笑、歓笑、爆笑、諷笑、媚笑、晒笑、泣き笑い、うす笑い、ふくみ笑い、忍び笑い、思い出し笑い、にが笑い、これ笑い、お世辞笑い、ほほえむ、ここつく、破顔一笑、独り笑い、盗み笑い、こくり笑い、空笑い、

北叟笑い、微笑、苦笑、艶笑、追従笑い、せせら笑い、あざわらう、くすくす笑い、嘲笑、嗤笑、冷笑、嬌笑、吹き出す、失笑、朗笑、目笑、回回大笑、笑い転げる、抱腹絶倒、腹をかかえる、腹の皮がよじれる、莞爾、一粲、脱頤、といくらでもある。

なんとたくさん笑い方があるのだらう。それとともに、笑い方を形容する言葉がなんと多いことかと思ひます。

笑いと知性が、ころあいに調和するとユーモアになる。なんでもユーモアがあればいいというものでもないが、これがあると人間関係は楽しくなる。律儀であることはもちろんいいのだが、それだけでは堅苦しすぎる。

とはいえ、基本的に本当の笑いがなくしては、ユーモアもなにもあったものではない。ユーモアはいいが、皮肉はいただけない。他人の痛みや悲しみを、からかったり笑ってはいけない。

清の時代に作られた『佩文韻府』という本には、一七〇余りの「〇笑」という熟語があるそうだ。更に「〇〇笑」「〇〇〇笑」などを入れると、三〇〇にもなるという。

で、あなたはどれだけ多様な笑いを持っているのか。

書くのは頭の体操

久武 盛真

月刊「泉文芸」は、この七月号で通巻二四号になりました。老人想所の自主文芸講座が事の起り、当初「紙の墓碑」を志して四七人が集まりました。

毎月二〇日迄に自分の体験や願望を、二四〇〇字未満に書きます。初心者は添削指導を受けられます。小説じみた作り話は全部排除して、ワープロとオフセットで三二頁の雑誌を作ります。

そして毎月第二火曜日には潮江市民図書館で、更に第三火曜日には老人想所で合評会を重ねてきました。合評はお互いの研修ですから仲間褒めはしません。忌憚なく「この表現は感心しました」とか「ここはこんな風に工夫しなさいよ」といったあんなに率直に批評を交換します。

年末には十二ヶ月分をまとめて、目次



「朗読トネリコの会」

「トネリコ」ってなに？と聞かれることがよくあります。五月頃頃追手筋に煙るように咲いている街路樹のシマ・トネリコから頂戴したものです。

一九八二年、丁度その季節、市民学校で、初の朗読教室が開かれました。もつと上手に話せるようになりたい、本が読めるようになりたい、そして美しい日本語とは……と、それぞれの思いで受講しました。

その一期と二期の終了生が集まって、折角基礎を学んだのだから、もう少し頑張って続けたいと「朗読トネリコの会」をつくりました。

当時は人数も結構多く、適当な会場がなく転々とし、定まった講師もなく解散寸前まで来ていました。その時幸運にも、現在の私達の講師である国常先生を紹介していただき、会場も潮江市民図書館が借りれるようになり再出発することができました。



月に二回（第二・四水曜日夜）全員七名が集まって学んでいます。ある時期は、

持ち味を磨いて

浜田 幸子

「上町婦人学級」

昭和六十三年五月学級生三十名でスタートして以来、上町婦人学級は毎年七、八回の講座を組み、幅広くユニークな発想を求めて活動している。

そのために講座の場を公民館から外へ移すことも多い。絵金まつりの夜は現地赤岡町で、近森敏夫先生に金蔵の凄まじい絵について学んだり、鏡川畔で行なう「土佐の暮しの文化を守る会主催の「若水迎え」どんと」「花枝折り・水まつり」にも積極的に参加して、伝承行事の大切さを体験する。

またテレビドラマを通して土佐を学ぶという観点から今年も、広谷喜十郎先生に「NHK大河ドラマ太平記と土佐」の講演をお願いしている。その他土佐人の温かいユーモア精神のみならずを知る意味での民話の講座を市原麟一郎先生に、女性のたしなみである作法、礼儀の講義を岩井信子先生に、それぞれ毎年テーマをかえてお願いしている。そして公民館



体験学習も取り入れながら

川添 歆一

「土佐エルブの会」

女性の発想を育て合う

松崎 淳子



エルブはフランス料理を味わう「ハーブの夕べ」を開いたとき、発起人が全員女性で、しかも業種は多彩―会社社長、学校経営者、建築士、アナウンサー、フリーライター、薬剤師、ホテル業、大学教授などなど。互いに初顔合わせであり、それだけにこの顔ぶれの霧散が惜しまれ、結果として点が線となり、更に面へと拡がる動きになりました。

以来、異業種から会員を漸増して現在三十五名。ハーブのみならず、食文化、生活文化を論じ、女性の視点からの提言活動をめざす会です。まずは地道にお互いを知ることから。月例会の会員の卓話、年二回のゲスト招

と表紙をつけて三九〇頁の本に仕上げます。それが今では一〇冊になって、作者自慢の宝ものになりました。国会図書館などの蔵書にも加えて頂きました。

長い間には顔触れは交替しました。初回からの人を含めて四〇代から八〇代の十五人が、意欲的に続けています。既に自叙伝を刊行した人は六名あります。他に五名はいつでも刊行できる迄に書きためています。参加歓迎。会費無料。作品掲載者の印刷費負担は千円です。

連絡先 高知市百石町一〇九一三二
電話 〇八八八―三二―三三三三

先生と一緒に幼児向き童話の朗読で図書館めぐりをしたり、施設訪問にも出掛けました。

いい講師に恵まれたことは勿論ですが、ここまで長く続いている原因の一つには一人一人が肩を張らずコツコツと努力を重ねている姿勢に、お互いが無意識のうちにも励まされ合っているのではないかと考えます。トネリコの花のように、目立たないけれど息長く、持ち味の出せる会に成長したいと頑張っています。

連絡先 高知市南久万一〇八二二
電話 〇八八八―七五―五七二七

で行なう講演講座は広く一般住民にも門戸を開き、その案内文書は町内会長を通して上町二千戸の家庭へ回覧される。

一方女性らしい実習にも力を入れ、団扇やネクタイ、内裏びな、ちぎり絵、七宝焼などの手づくりにも取り組んでいる。上町婦人学級は独自性は追究しながら、心を見つめた文化活動を広げ、上町のふれあいの輪の大きな核になることを念じている。

連絡先 高知市上町三丁目一〇八
ソガマンション四〇一
電話 〇八八八―七二―九五五九

待、年一回の一泊研修旅行が目下のカリキュラムです。会員の卓話を通して知る社会課題、多様な価値観との出会い、発見。そして、しめくりはハーブ料理の会食です。

運営は全員参加。白紙からの出発なので、合意点を順次会則と文言化するなど、良識の所在を探る作業の楽しさもあります。

連絡先 高知市南はりまや町一―七
一八「漢方テラオ」内 寺尾智恵美
電話 〇八八八―八二―二六一七



御瀨のほぼ中心に位置する「御大典記念」のこの時計台は、昭和三年に村の青年団が寄付を募って建立した。当時、時計にはサイレンが直結され、人々に正確な時間や魚市場のセリ開始等を知らせた。爾来六十余年、サイレンは壊れ、時計も代替わりしたが、今日も人々の暮らしに時を刻み続けている。

風伯

好きな方だけご覧下さい

刊誌の広告を見た時だったから、随分と時世に疎かったものだと思う。

ところで、高知新聞で紹介される映画案内では、市内十一映画館の上映作品名と時間とが掲載されているが、別の、我家で購読している中央紙高知版に掲載される映画館案内では、九館の紹介しか無いことに最近気づいた。

この紙面に登場しない二館を高知紙上で探してみると、両館とも成人映画専門館なのだ。私は、例えばボルノ雑誌を店頭で置かない書店の経営方針を、ボルノ誌主体の書店の経営方針と同等に支持をする。

同様に、如何わしい広告と共に成人映画の広告を排除する新聞があっても、幾分滑稽ではあるが、それはそれで結構だ。

だが、情報提供としての映画館案内から、題名の活字すら汚らわしいとばかり、館の存在自体すら抹殺する「文化」は支持しない。この新聞社が先日、例の写真集が警視庁の見解として芸術性を認め、規制の対象とはしない決定をしたとかなり大きく記事にした。

例えば二本まがいの売られ方でも、芸術の名に於て樋口可南子のヘアを容認すること、成人映画の紹介自体を情報の名に於て容認することは、それほど別のことではなからう。(南北)



新刊 ほのぼの子育て

こんなときどうする？

高知市立保育園園長会編
B 6 判・244頁 定価1,000円(本体971円)

子育てに悩みをお持ちのお母さんに、プロである保育園長たちが答えた実践的子育てQ&A。学齢前までの子育てに対する疑問に、日々多くの子供に接してきた長年の経験を生かし、分かりやすく具体的に答えた。自信と希望を持って、温かい気持ちで子育てを！

高知市立保育園園長会編
高知市文化振興事業団

講座

「現代木炭事情」

講師 坂本 開作氏

(社)高知県特用林産協会専務理事

燃料あるいは地域おこしの一素材として脚光を浴びる「炭」について3回にわたって解説。

高知県木炭史(7月5日 pm 6・30)

炭の民俗誌

高知県の林業と製炭

紀州備長炭との交流

炭焼きの技術(7月12日 pm 6・30)

土佐備長炭

備長炭・黒炭の焼き方

炭の種類と炭窯

木炭の新しい用途(7月20日 pm 2・00)

木酢液から消臭剤

活性炭による土壌浄化

全国・県下の事例

※会場 高知県自治会館4階会議室

※受講料 各回400円

※定員 30人(定員になり次第)

(締切)

※お申し込みは電話で事業団まで

民族文化映像研究所の映画をみる会

上映作品 アマルールⅡ 大地の人 バスクⅡ

16ミリ・カラー 95分 1981年製作

解説 澤幡 正範氏

(民族文化映像研究所・カメラマン)

■日時 7月13日(土) pm 1・30 中央公民館

7月14日(日) pm 1・30 中央公民館

7月15日(月) pm 6・30 平和資料館・草の家

■入場料 1200円

※お問い合わせは事業団まで

こどもの本を語る 第6回高知大会

7月28日(日) 午前9時30分～午後3時30分

ところ 潮江市民図書館(棧橋通2丁目)

*講演 「語りとジュマーク・ハイウオーター」

金原 瑞人さん(英米文学翻訳者)

*講演 「増殖する物語たち」

酒寄 進一さん(ドイツ文学翻訳者)

*分科会 (午後1時30分～午後3時30分)

■協力券 500円(幼児託児所あり)

お問い合わせは、高知西こども劇場(☎40-2166) または事業団まで